

書写の要素 字形：点画の組み立て方

原理から理解する「接し方」



山梨大学教授 宮澤 正明
みやざわ まさあき

文字の点画相互の位置関係には必ず「離・接・交」の三つが存在します。

文字を正しく整えて書くという観点からとらえると、「離」の関係では「方向・長さ・画間」の要素をあげることが出来ます。同じように、「接」の関係では「接し方」、「交」の関係では「交わり方」となります。

今回取り上げる「接し方」は、点画と点画が接するだけのことなので簡単なことのように思われます。しかし、それは図形的に見た場合のことで、書き文字の接する部分の姿・形はある種の原理が働いて書かれ、しかもそれが字形の整いとかかわることから、接し方の原則としてとらえることもできそうです。

接し方の原理、それに基づく原則とはどのようなものでしょうか。探ってみましょう。

点画の始筆、送筆、終筆の各部と他の点画の各部が接する組み合わせの主な種類をあげてみましょう。

そのほか、先に書く点画の始筆が少し出る字例としては次のような漢字があります。

区報会写

どうして先に書く始筆が外に出るのでしょうか。

これは、筆順によるものと考えることができます。すなわち、次の画へと少しでも短い距離で移動しようとする「近道の原理」が働いたものと言えるでしょう。「近道の原理」は、「左・右」の一・二画目のように、先に書いたほうが短くなる原則をも導き出しています。

「区」

教科書体活字では、原則に基づいた接し方の区別がなくデザインされているようですが、この原理や原則を知って書くと、始筆相互の接し方は適切に書かれ、字形も整いやすくなります。微妙な部分ですが、筆順正誤の判断基準にもなります。臣・成・区など筆順を誤りやす

○始筆＋始筆へ先に書いた始筆が少し出る
始筆相互が接する部分は数多くありますが、先に書く始筆の先端が少し出る、という原則をここで紹介します。

口日臣長

右の字例のように、縦↓横の接する部分は縦の始筆が少し外に出ます。

成皮原広屋

成・皮のように、左払い↓横の接する部分は、左払いの始筆が少し出ます。原・広・屋のように、横↓左払いの接する部分は、横の始筆が少し出ます。

い漢字はその接し方で誤りを発見できることが多いので、ぜひ、確認してみてください。

なお、「及・秀（丩）」の一・二画目は、先に書かれた左払いの始筆が横部の送筆の部分に接する字例であり、始筆相互の関係には当てはまりません。

○終筆と終筆

口中目田国

「口・中」「目・田・国」のように囲まれた四角の右下は、二通りの接し方があります。

「口」形は横画の終筆が、「目・田」形は縦画が出ます。「口」は、近道の原理で二画目の終筆は三画目に向かう力が働くことから、横画の終筆が外に出ます。

「目・田・国」などは、内部に画があるので、二画目で一旦停止します。内部の余白を広くとるためにも、縦書きの習慣から縦画を強調するためにも長く書いておく必要が生じるわけです。